

まいつるパート II

令和5年度 No.16 校長室だより

通算No.34 (R5. 12. 15)

霧島市立国分小学校長

☆ 児童期から思春期にかけて育てたい心の機能～教育心理の視点から～ No.2 ☆

① 快体験と不快体験

「不快体験を自分で快体験に変える経験」

- 不快体験を、自分で行動し、工夫することによって快体験に変える、という経験をしておくこと。
- 不快な体験を快体験に変える工夫をすることが現実感覚を育てる。
- 快体験ばかりだと、不快体験に対する対応の仕方を学習できない。
- その結果、不快体験を一方向的に拒否するか、不快体験から逃げるだけになってしまう。
- 不快を快に変える経験をしておかないと、思春期に入ってから苦しい。

—女子中学生の言葉—

「小学生の時は何もなくても友達が私の周りに集まってくれた。でも中学になったら友達が来てくれなくなった。」

といって自分で何をするわけでもない。この状態が不快なのであれば、自分で友達を作るための行動をとればよい。しかし、自力で不快を快に変えようとする発想がない。

「不快を快に変える力の育成のためには」

- 親として良かれと思って何でも先回りしてお膳立てしてあげるのではなく、我が子のレベルにあった適度な負荷を子に体験させる。
 - どうしたらいいかを子ども自身に考えさせ、実行させる。
 - 何をどこまで子どもにさせて、どこから親が援助するのかをよく考える。干渉と介入の時期と程度を考える。
- 「転ばぬ先の杖」ではなくて「転んだ時の起き上がり方」を学習させる。

- 親は我が子の限界を勝手に決めない。
「この子は〇〇が苦手なので、させないでください」はNG（疾病や疾患は除く）
- 子どもの失敗を見守る度量が親には必要。「親」という漢字は木の上に乗って見ると書く）
- 失敗の中から子どもが自力で工夫していく姿を見守る度量が親には必要である。見守るのは親も苦しい。
- 最初からうまくはいかない。不完全でよい。不完全を重ねていく（練習していく）ことで完全に近づく。最初から完全はない。

② けじめ感覚

- けじめ感覚→基本的生活習慣・規則正しい生活に相当する。
「けじめ」には多くの種類がある。
時間のけじめ、人間関係のけじめ、金銭のけじめ、服装のけじめ、公私のけじめ、善悪のけじめ
- 特に家庭で「けじめ」が機能していることが大切。家庭で「けじめ」を実際に経験していれば、「けじめをつける」という心の機能が育つ。心の機能は、実際に行動してはじめて育つ。行動が心を育てるのである。

③ 現実のルール

何かを達成するためには、何かを我慢しなければならない。何かを得るためには、何かを我慢しなければならない。何かを得るためには、何かをあきらめねばならない。

→あれも欲しい、これも欲しい、とはならない。

→あれも嫌、これも嫌とはならない。

学力をつけるために、我慢して授業を受けている。スポーツで勝つために、つらい練習も我慢している。

学力をつけるために、遊びを我慢しなければならない。スポーツで勝つために、遊びを我慢しなければならない。

- 学校は社会で自立していくための力を養う場所である。（いろいろなことが起こる。）
- したがって、社会で自立していくために必要な力を学校で学習しなければならない。
- 「社会の中で生き抜くために必要な心の機能は何か？その心の機能を育てるためには、我が子にはどんな環境で、何を体験させることが必要なのか？」を親がよく考える必要がある。